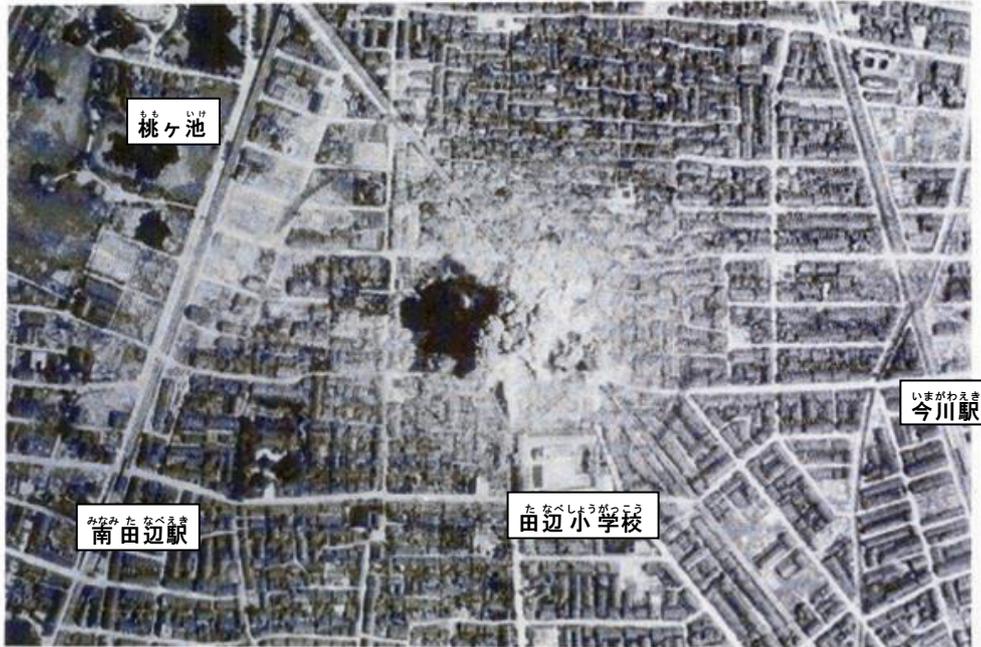


たなべ おと もぎげんばく はな 田辺に落された模擬原爆のお話し



パンプキン(模擬原爆のこと)の爆発、大阪市東住吉区田辺本町(現田辺二丁目)、1945年7月26日(模擬原爆投下時米軍撮影)

太平洋戦争が終わる直前の、一九四五年七月二十六日午前九時二六分、大阪市東住吉区田辺地域の上空に一機の爆撃機があらわれて、現在の田辺小学校の北側のあたりに大型の爆弾を落しました。

当時、田辺のひとびとの多くは、空襲から逃れるために、農山村に引越していったとびとは大きな被害を受けました。むかしの警察局の資料には、死者四人、重傷八人、軽傷七十七人、行方不明五人、全壊二〇三戸、半壊二一八戸、罹災者一三〇二人と記され、また戦後に大阪市がつくった資料には死者七人、重軽傷者七三人、消失倒壊戸数四八五戸、罹災者一六四五人と記録されています(昭和二〇年大阪市戦災概観)。

ながいあいだ、田辺のひとびとは「トーン爆弾」が落されたと思っていました。ところが実際は5トン爆弾だったのです。それも本物とそっくりの形と大きさの模擬原爆(もぎげんばく)を使って、原子爆弾を落す訓練をしたのです。

この事実は、一九九一年(平成二年)に愛知県の市民グループ「春日井の戦争を記録する会」の方々が国会図書館でアメリカ軍の当時の文書を調べてはじめてわかりました。田辺に模擬原爆が落された十一日後に広島、十四日後に長崎の人々は、アメリカ軍が落した本物の原子爆弾

によって、人類史上に残る、ひどくむごたらしい被害を受けました。

私たちは、東住吉区田辺の地域が広島、長崎の原子爆弾投下とつながりがあったことに驚きました。このことはそれまで田辺でも余り知られていませんでした。模擬原爆でお父さまを亡くされた村田保春さんは、自費で犠牲者の慰霊碑を建てられました。私たちは毎年七月二十六日にその碑の前でつどいをもつて、模擬原爆の投下で被害を受けた方々を悼み、人々の平和への思いが高まることを願い、悲惨な事実を多くの若い人へと語り継ぐとろくみを続けています。

7・26田辺模擬原爆追悼実行委員会



写真 被災直後の様子

もぎげんばくとうか じだいはいけい
模擬原爆が投下された時代背景

第二次世界大戦が終わりに近い頃、ナチスドイツが進めていた原爆開発に對抗して、アメリカ政府と科学者は原爆の開発に総力で取り組んでいました。ドイツが無条件降伏した後は、今度は日本が対象になり、科学者と兵器の専門家がよって、日本の中のどこに原爆を投下するかが話し合われ、秘密任務の航空部隊がつくられます。そして、地上九〇〇メートル前後の上空から原子爆弾を投下したときに、アメリカ兵が乗った飛行機が、爆発の衝撃に巻き込まれないために訓練を行う必要がありました。

模擬原爆は、長崎に落とされたプルトニウム原爆と形や重さが同じにつくられました。重さ一万ポンド、直径一・五メートル、長さ三・二五メートルの巨大なもので、カボチャのような形なので「パンキン爆弾」と呼ばれました。5トン近い爆薬を充填した大型爆弾であったために、大きな被害をもたらしました。

七月二〇日からは日本の各地で最後の演習が始まり、広島に原爆を投下するまでの間に、三八地点で模擬訓練を行っています。

アメリカ政府は、広島・小倉・新潟・長崎を、原子爆弾を投下する目標とする命令書を、七月二五日にくだします。田

辺に模擬原爆が投下されるのはその翌日の七月二六日のことです。そして、同じ日に、アメリカ・イギリス・中国が共同して日本に対して無条件降伏を求めた「ポツダム宣言」を示しました。しかし、日本の最高戦争指導会議はこれを無視してとりあわず、八月六日に広島に最初の原子爆弾が投下されます。

続いて八月八日に五地点で模擬原爆の訓練を行っています。この日にはソビエト連邦が日本に対して戦争を開始します。その翌日の九日には長崎に原爆が投下されました。八月十四日には日本の降伏が決定的となっており、また、アメリカ軍には原爆が一つもない状況でしたが、愛知県内に七個の模擬原爆を投下しています。そして、一九四五年八月十五日正午、満州事変から十五年、真珠湾攻撃から三年九か月にわたる戦争は終わりを迎えました。

模擬原爆は全国四十四の目標に四十九発が落とされました。近畿では七月二四

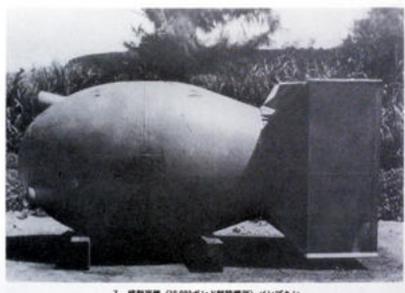


写真 模擬原爆パンキン

日に神戸市内の四方所と滋賀県大津市、七月二六日に大阪市東住吉区田辺本町(現田辺二丁目)、七月二九日に和歌山県有田市と京都府舞鶴市、八月八日に福井県敦賀市に投下しています。

もぎげんばく げんばく
模擬原爆と原爆のお話し

田辺の模擬原爆そして原爆とはどのようなものだったのでしょうか。被害にあわれた方やその遺族の方から直接お聞きしたお話しの一部を紹介します。

たなへ もぎげんばく はな
田辺の模擬原爆のお話し



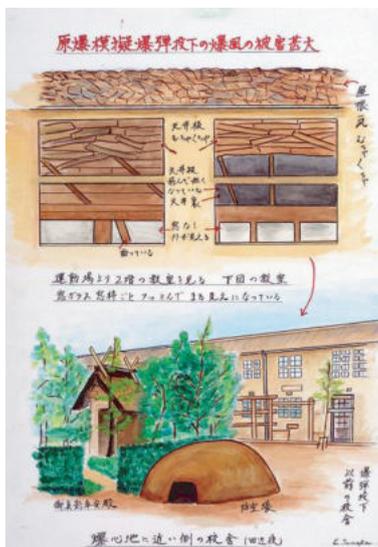
■山崎昇さん(山坂四丁目)は、戦争後まもなく日記に田辺の模擬原爆の様子をかきとめています。「私と母と一緒に全身に黒煙となった砂塵を浴びて防空壕の中に潜り込んだので、やっと助かった。(略)眼に何かの破片が入ったらしい女性が、ドス黒い血の流れた眼を両手で押へ、あちこち血で黒く染まった身形をして、唯、黙々と静かな早い歩調で歩いていった。担架に乗った外傷人も相当に運ばれていた」

■橋博さん(当時16歳・田辺二丁目)は柏原の工場で地雷の部品づくりをさせられました。「当時は情報を得る方法は新聞しかなく、さほど大した報道はされてなかったのに、広島に新しい爆弾が

図 模擬原爆が投下された地点の様子(現田辺二丁目)



作者:垣村さん
 田辺小学校を卒業したあと昭和18年に兵役につくまで田辺本町四丁目に住んでいた当時の記憶をたどりながら爆心地の周辺を拡大したものの(談)。

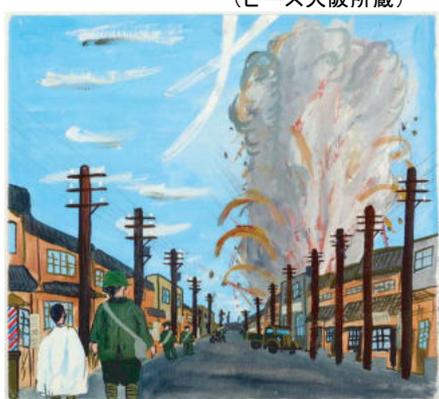


左 模擬原爆投下後の田辺小学校の様子

(絵:田中さん)

下 模擬原爆が投下された時の様子

(絵:山内さん) (ピース大阪所蔵)



落ちたことを新聞で後で知って、食い違いが大きかった」といいます。

■保田利男さん(当時小学校1年生)は「爆弾や焼夷弾は日常のことだったけど、大きくなってヒロシマを訪れて悲惨さを知り、田辺の爆弾がその訓練だったと聞いて身震いした」そうです。

■村田保春さん(当時28歳)は豊川市の軍事工場にいました。お父さんの繁太郎さん(当時55歳)は田辺の家において、爆弾に気づき、防空壕に走り込もうとしたが、その途中で厚い壁土の下敷きになって圧死しました。2階建ての家がつぶれ、大木が倒れて戦場のようでした。その頃、大阪には霊柩車がなく、お父さんの遺体を大八車に乗せて鶴ヶ丘駅東にあった焼き場に運んだといっています。

■海野修さん(当時小学校2年)は、29から仁丹くらいのもの(爆弾)がぼつんと離れ、何十秒か、ぐおーという、ちよつと今の時代で例える音はない、地獄に引きずられるような音がして気づいたら向かいの家の下敷きになっていました。誰も助けられず、自分で出て出てきたのは昼前でした。お母さんやお婆さんはガラスだけが寝ているというので行ってみたら、小学校に寝ているというので行ってみたら、ケガ人が講堂にいらんでおり、それが女性と子どもばかりで、血みどろの上に爆風で舞い上がった白い埃がいっぱいべっとり付いて、まるで映画に出てくる幽霊みた

いな状態でずらつと五〇人くらい並んでいました。みんな唸っていて、「痛い痛い」と言う人もあれば、「助けてくれ」と言う人もあるという状態だったとのこと。

■石橋忠男さん(当時9歳・北田辺小学校4年生)は、家の前のガラスが全部割れて、破片が手首に当たって、未だに手首に傷が残っています。

■原章枝さん(当時8歳)は、模擬原爆が落された後をみに行くと、掘られたようにすり鉢状の穴があいて、付近のガラスは木ノ端みじん、足下はガラスがいっぱい。爆風で飛ばされた畳一畳が電線に引っかかってぶらぶらしていました。

広島、長崎の原爆のお話し



■飯田清和さん(現住吉区在住)は9歳のとき、広島で原爆の被害にあいました。爆発地点から約八百メートルにある、小学校の校庭で朝礼中のできごとで、奇的に命は助かりました。しかしその後避難先で「ピカドン(原爆のことを日本人

はそうよんでいました)の子」といじめられ、原爆の被害者であることを隠してきただといえます。大阪に移り住んで、テレビで田辺の模擬原爆のことを知り驚きました。広島で亡くなった二十四万七千人の冥福と世界の平和を祈り、今は悲惨な体験を語りついでおられます。飯田さん

が当時のむごい光景を書いた文集の一部を紹介いたします。

「助かった数名の生徒達は建物の下敷きになった友達を救うことも出来ず、ただ泣きばかりでした。押しつぶされた土間の中には先生の姿は見あたりません。(中略)急に激痛を感じたとき、私の衣服は真っ赤に血に染まっていますではありませんか。流れる血は止まる事を知らず、にぶく光って吹き出てきます。左腕は肉を深くえぐられていて骨さえ見ることが出来ます。口からも血が出てきます。今まで唾とばかり思っていたのが血であったとは…。足にはガラスが突き刺さり歩くのにずいぶん痛みを感じます。一歩進むたびに貧血と痛さのために今にも気が遠くなりそうでした。校舎に眼を向けると四五度に傾き今にも倒れかかっているではありませんか、いやそればかりではありませぬ。屋根は全部飛び、無惨にも朝礼をしていた生徒達の頭上に落下しているではありませんか。落ちた屋根は無情にも多くの生命を奪っていました。瓦にはまだ乾いていない血が不気味に光っています。白い手はみんな開いていて材木の間から見られます。この様は一生忘れる事が出来ませぬ。(略)「街の中で飯田さんがみた光景は、次のようでした。「道路の両端には黒焦の死体、ぶくぶく脹れ上がった死体があつとつと続いているではないか、中には子供も女学生もいた。

まだそうして分るのは良い方で全く男か女か分らないが多かった。用水槽の中では数人の男女が水だきにされて死んでいた。その脹れ上がった死体をひとりひとりとりていっている将校が見られた。彼の母か、あるいは妻を捜しているであろう。中には黒こげの小さい死体に抱きついて泣きわめいている女もいた。黒こげの死体が半焦の小さい死体を抱いているのもあった。(中略)いつやってくるかもしれない原爆症におびやかされながら私達被爆者の恐怖心はまだまだ絶える事を知らず続くことだろう」

■山科和子さん(現田辺一丁目在住)は、長崎市内の勤め先で原爆の被害にあいました。原爆が投下された地点から三五〇メートル程しか離れていない自宅に帰ると両親はすでに息はなく、遺体の横で寝たのだそうです。妹、弟も失い、これまでの長い間、手足が硬くなつて歩けない後遺症がずっと続きました。今はご縁があつて田辺にお住まいで、長崎の原爆の悲劇、そして戦争にまきこまれ被害にあった市民には、いまだに苦しんでいる人がいるのにと、

からも補償がなく、戦争がいかに愚かなことか、語り継いでおられます。





もぎけんしばくだんとうかあとちひ 模擬原子爆弾投下跡地の碑

一九四五年七月二十六日九時二十六分、広島・長崎への原爆投下を想定してこの田辺の地に模擬原爆が投下され、村田繁太郎(当時55歳)他6名が死亡、多数の方が罹災しました。ここに犠牲者の冥福をお祈りし、戦争のない世界の実現と全人類の共存と繁栄を願い、碑を建立します。

2001年3月吉日

建立者 大阪市中央区谷町6丁目9番 18 号
株式会社 村田商会
代表取締役 村田 保春(84 歳)

～模擬原爆のことを知ったあと、投下地点の周辺の各戸に、この事実を記したチラシを 3000 枚くばり、多くの声がよせられました。その中のお一人、村田保春さんはお父さまの死が模擬原爆によるものであったことをはじめて知り、おどろき、そして「55年後の親孝行」として、被害にあった人々を慰霊(いれい)する碑(ひ)を投下跡近くに建てることを決められました。～(碑は大阪市東住吉区田辺 1-14-18 の恩楽寺にあります)

発行／7.26 田辺模擬原爆追悼実行委員会

資料：「7.26 田辺の模擬原爆証言集」2002 年7月 26 日改訂版